

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

2020.1

No. 747



※ P5329 参照



※ P5353 参照



※ P5343 参照

目次

[巻頭言]

小さき命を遊ばせる 5324
総長 山極 壽一

[大学の動き]

- 名誉教授懇談会を開催 5325
- 第14回京都大学東京フォーラムを開催 5326
- 第2回京都大学-ウィーン大学ジョイントワーク
ショップを開催 5328
- 北米拠点開設1周年記念式典を開催 5329
- 文部科学省2019年度「世界で活躍できる研究者
戦略育成事業」に採択 5331
- 令和元年度定年退職予定教員 5332

[部局の動き]

- 第12回次世代グローバルワークショップを開催 5336
- 経済学部創立100周年記念行事を開催 5337
- 2019年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 5337
- 第8回国際シンポジウム「総合生存学とアジアの
SDGs」を開催 5338
- 第2回マヒドン大学 On-site Laboratory ワーク
ショップを開催 5340
- インドネシア共和国のIPB大学 Arif Satria 学長
が京都大学を表敬訪問 5341
- 化学研究所「第119回研究発表会」を開催 5342
- ワイルド&ワイズ「SDGs へ向けた森林と人間の
共生」共学教育プログラムを実施 5343
- フィールド科学教育研究センターが環境省自然
環境局と連携協定を締結 5345

- 高等研究院 iCeMS が、アブドラ王立科学技術大学
と MOU を締結 5346
- 高等研究院 iCeMS は ZEISS-iCeMS イノベーション
コア開所記念式典を開催 5347

[寸言]

ラグビーワールドカップに見た日本の将来像
堀田 徹哉 5350

[随想]

小麦蛋白質の異分野共同研究事始め 5351
名誉教授 裏出 令子

[洛書]

科学の進歩を先導する技術革新 山本 拓也 5352

[話題]

- 広報倫理講習会を開催 5353
- 令和元年度社寺見学会を実施 5353
- 令和元年度総長杯ボウリング大会を開催 5354
- 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施 5355
- 宇治キャンパスで、リサイクルフェア・交流会を開催 5355
- 宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催 5356

[訃報]

- 松浦 邦男 名誉教授 5358
- 吉田 潤一 名誉教授 5359
- 堂下 修司 名誉教授 5360



京都大学



巻頭言

小さき命を遊ばせる

総長 山極 壽一

皆さま、新年あけましておめでとうございます。

今年も新年の抱負を一筆したためました。

「小さき命を遊ばせる」

今年の子年であります。ねずみは非常に小さな存在ですが、繁殖力が高くてどこにでも姿を現し、この世でインパクトが強い存在とも言えます。そういった「小さき命を遊ばせ」ながら、大きなインパクトを世界に与えていこうというのが今年のテーマです。

さて、京都大学は「自由の学風」そして「自由な対話」を尊重するなかで、創造の精神を育んできました。今は自由を謳歌するだけでなく、社会に対して説明責任を負う時代であり、様々な倫理上の責任が大学にはあります。しかし、規制を厳しくして監視するのではなく、互いに励まし合い、情報を交換し合って間違いを犯さないように予防することが大切です。

昨年の吉野彰先生、一昨年の本庶佑先生のノーベル賞受賞をはじめ、京都大学は今、世界に冠たる存在として注目を浴びる存在になりつつあります。私たち自身が世界を先導するという自負を持って、襟を正していかなければなりません。そして、世界の情勢を見つめ、他の多くの機関と連携し、大学の将来を見据えながら、歩んでいかなければなりません。

あと2年と少しで京都大学は125周年を迎えます。昨年、それに向けて「京大力、新輝点。」という新たな標語を考えました。この「輝点」には「起点」および「機転」という2つの意味も込められています。ねずみのように点は小さいけれど、磨けば輝き、集まれば大きな力を発揮します。

知の拠点として、そして様々な創造性を育むキャンパスとして、日本の先端、そして世界の先端を歩まなければならないということを肝に銘じて、これからも京都大学を盛り立てていきたいと思えます。

本年も、京都大学をどうぞよろしく願いいたします。

[目次に戻る ↶](#)

大学の
動き

名誉教授懇談会を開催

芝蘭会館において、11月30日（土）、第92回名誉教授懇談会が開催され、61名の名誉教授の他、総長、理事、監事、部局長等合わせて80名が参加しました。

秋に行われる名誉教授懇談会では、当該年度に名誉教授の称号を授与された教授（文系・理系各1名）による講話会を行うことが慣例となっており、文系からは林 晋 名誉教授（文学研究科）による「歴史学から見た京都学派－西田幾多郎と哲学の道－」、理系からは杉江俊治 名誉教授（情報学研究科）による「システム制御と社会」と題した講演が行われました。

その後の懇親会は、山極 壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、川添信介 理事・副学長による乾杯の発声で始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに閉会しました。



林名誉教授



杉江名誉教授



挨拶をする山極総長



乾杯の発声をする川添理事・副学長



懇親会の様子

(総務部 (総務課))

[目次に戻る ↗](#)

第14回京都大学東京フォーラムを開催

「面白い（おもしろい）を探求する－老いないために、老いを知る－」をテーマに、第14回京都大学東京フォーラムを12月3日（火）に帝国ホテル東京にて開催しました。今年の出席者は約370名で、本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等、数多く出席があり、学内からは山極壽一 総長をはじめ、理事・副学長、部局長等が出席しました。

また、今年も、「総長賞」2018年度受賞者である学生や、京都大学体験型海外渡航支援制度～鼎会プログラム「おもしろチャレンジ」～の2018年度採択者である学生も出席し、現役の学生を代表して、出席者との交流を深めました。

本フォーラムでは、山極総長による挨拶の後、近藤祥司 医学部附属病院准教授が「老化と対話する医療から新しい健康概念へ」と題して、また森谷敏夫 名誉教授（現京都産業大学教授・中京大学客員教授）が「健やかにアクティブに生きていくために」と題して講演を行いました。

続いて稲葉カヨ 理事・副学長を進行役に、山極総長と近藤准教授、森谷名誉教授の4名により、老いとは何か、老いないためにどうすればいいのか、老いたときに何ができるのかについて、パネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッション終了後に実施した懇親会では、来賓の玉上 晃 文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）、平野信行 三菱UFJフィナンシャル・グループ取締役・執行役会長、竹本直一 情報通信技術（IT）政策担当大臣・内閣府特命担当大臣からそれぞれ挨拶がありました。



挨拶する山極総長



講演する近藤准教授



講演する森谷名誉教授



講演会場の様子

大学の
動き

また、今回の東京フォーラムの開催に先行して、経済界のトップで活躍されている方々による総長支援団体「京都大学鼎会」の第8回総会が約80名の出席者を得て同日に開催され、今後の本学の発展に向けての意見交換などが行われました。

本フォーラムは、首都圏における本学の情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各界で活躍されている本学関係者の結束を図るという効果を期待して実施しています。今後もこのような機会を継続的に提供し、本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えています。



パネルディスカッションを進行する
稲葉理事・副学長



パネルディスカッションの様子



挨拶する玉上審議官



挨拶する平野会長



挨拶する竹本大臣



懇親会場の様子



参加学生ら

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

第2回京都大学－ウィーン大学ジョイントワークショップを開催

本学はウィーン大学と共同で「第2回京都大学－ウィーン大学ジョイントワークショップ」を10月24日(木)～25日(金)に開催しました。

10月8日(火)にウィーン大学と戦略的パートナーシップを締結し、今回は締結後初めてのジョイントワークショップとなりました。

ウィーン大学と本学は2018年9月に第1回ジョイントワークショップを開催しました。

前回は「比較政治学」「材料科学」「認知生物学」の3分野が参加し、第2回目の本ワークショップではこれらの交流を発展させるとともに、新たな連携が期待される分野の研究者交流創出を目指し、前回実施した「比較政治学」「認知生物学」と「美術史」「アジア学」の2つを加えた4つのテーマの分科会を実施しました。4つのテーマの内、3つが人文社会学系であり、人文社会学系の分野を多く含むことも今回のワークショップの特徴のひとつとなります。

開会式では、稲葉カヨ 理事・副学長、ウィーン大学代表団長としてゼバスティアン・シュツェ ウィーン大学歴史文化学部長による開会挨拶が行われました。その後、両大学の研究者が4つの分科会に分かれて研究発表を行い、活発な議論を行いました。

また夜の懇親会には湊 長博 プロボスト 理事・副学長、佐治英郎 研究担当理事補も参加し、戦略的パートナーシップのもとで今後行っていく研究交流について、積極的な意見交換がなされました。

2日目の全体セッションでは、各分科会の代表者が議論の内容と戦略的パートナー校となったことによる今後の協働に向けた展望を報告しました。その後は質疑応答の時間が設けられ、山極壽一 総長より4分野を横断するような質問がなされるなど、活発な意見交換が交わされま



司会をする三橋 紫 国際戦略本部 稲葉理事・副学長の開会挨拶
副本部長



基調講演をするシュツェ学部長



基調講演をする平川佳世 文学研究
科教授



レセプションにて乾杯の挨拶をする湊プロボスト 理事・副学長



山極総長の閉会挨拶

大学の
動き

した。最後に山極総長による閉会の言葉をもって、ワークショップは終了しました。

その後はエクサカーションとしてiCeMSと清風荘を訪問し、双方の参加者にとって京都大学の研究や歴史について深く知る機会となりました。

【関連リンク】

第2回京都大学-ウィーン大学ジョイントワークショップ

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/symposium/kyoto-vienna-joint-workshop/>

ボルドー大学とウィーン大学を戦略的パートナー校に認定し、戦略的パートナーシップ協定を締結しました

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/international/events_news/office/kikaku-joho/kokusai-kikaku/news/2019/191008_1.html



集合写真



施設見学で参加者たちに話をする
北川 進 iCeMS 拠点長

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)

北米拠点開設1周年記念式典を開催

11月20日(水)、アメリカ・ワシントンD.C.のCapital Hiltonホテルにて、本学北米拠点の開設1周年記念式典を開催し、現地同窓会であるワシントンDC京大会やニューヨーク洛友会の同窓生を含む、81名の参加がありました。

北米拠点は、欧州拠点(ドイツ・ハイデルベルク)、ASEAN拠点(タイ・バンコク)に続く本学3番目の全学海外拠点として、2018年10月にワシントンD.C.に開設し、北米地域における本学のプレゼンス向上、学術・学生交流活動の支援を目的に、北米地域の大学や学術関係機関、同窓会の方々と積極的な意見交換を行ってきました。本式典は、そうした拠点の活動を支援している方々との絆をより一層強化する機会となりました。

大学の
動き

式典では、山極壽一 総長の開会挨拶に引き続き、杉山晋輔 在米日本国大使館特命全権大使、鼎会^(※)副会長の西村義明 住友理工株式会社特別顧問、卒業生の久能祐子 S&R 財団理事長兼CEOおよび、Frank Jannuzi モーリン&マイク・マンズフィールド財団理事長より祝辞をいただき、京都大学の北米での活動開始について温かい歓迎の言葉とともに、今後の活動への期待が寄せられました。

続いて、Nathan Badenoch 北米拠点所長より、北米拠点の紹介とこれまでの活動について報告が行われた後、山極総長が、自身のゴリラ研究の成果を交えながら日本人の「自然」のとらえ方について講演を行いました。最後は、稲葉カヨ 理事・副学長(男女共同参画・国際・



杉山特命全権大使 祝辞 西村副会長 祝辞 久能理事長兼CEO 祝辞 Jannuzi 理事長 祝辞



Badenoch 所長 北米拠点紹介



山極総長 講演



式典集合写真

大学の
動き

広報担当) の挨拶で閉会しました。

引き続き行われたレセプションでは、山極総長の挨拶に続き、向 賢一郎 ワシントンDC 京大 大会会長および岡本裕晴 ニューヨーク洛友会名誉会長が、自身の京都大学での思い出や今後の北米拠点への期待を述べました。最後に、徳賀芳弘 副学長(大学基金・同窓会担当)の挨拶をもって、盛況のうちに閉会しました。

今後も、本学北米拠点は北米地域のハブとして、また、世界に向けた「窓」として北米地域との連携を深めながら、本学の国際化を進めていきます。

(※) 鼎会：京大卒業生財界トップによる総長支援団体

【関連リンク】

北米拠点ウェブサイト

<https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/north-america/>



向会長 挨拶



岡本名誉会長 乾杯



レセプションの様子

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)

文部科学省2019年度「世界で活躍できる研究者戦略育成事業」に採択

本学が申請した「世界視力を備えた次世代トップ研究者育成プログラム(Program for the Development of Next-generation Leading Scientists with Global Insight (略称“L-INSIGHT”))」が、文部科学省2019年度「世界で活躍できる研究者戦略育成事業」に、全国で2機関のうちの1機関として、11月に新規採択されました。

L-INSIGHTにおける世界視力とは、時間、地理、学問分野、セクター、文化圏などの境域を越えて見渡し、見抜き、見通す力のことです。L-INSIGHTでは、2030年代に世界一級の研究者となり得る世界視力を備えた人財を育成するためのプログラムを開発し、全学の若手研究者、さらに近畿圏、西日本地域、最終的には全国の若手研究者へと普及させていくことを目指しています。

L-INSIGHTを策定した背景としては、若手研究者が世界トップクラス研究者となるために必要な分野・地理・産学を越えた研鑽経験が得にくく、一時的に異分野・異文化交流を経験しても、その経験が学際的な融合研究、境界領域や新領域の研究になかなか結実していないという現状があげられます。

大学の
動き

そこでL-INSIGHTでは、若手研究者に海外連携機関や企業の研究者との交流機会を提供するのみならず、その交流経験を成果に結びつけるために必要な英文執筆力、成果発信力、外部資金獲得力などのスキルセット、および国際性、共創性、未来思考、チャレンジ精神などのマインドセットの強化を図っていきます。

【関連リンク】

2019年度「世界で活躍できる研究者育成事業」の選定機関の決定について

http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/sekaidekatsuyaku/1422222.htm

(研究推進部(研究推進課))

[目次に戻る ↗](#)

令和元年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員71名(教授61名, 准教授9名, 助教1名)が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	平 田 昌 司	文献文化学専攻 東洋文献文化学講座	中国における言語・文学規範と言語史の相関についての研究, 近代中国における文化越境現象の研究
	井 谷 鋼 造	歴史文化学専攻 歴史文化学講座	イスラーム時代西アジア史研究, アラビア文字刻銘文資料研究
	吉 田 豊	行動文化学専攻 行動文化学講座	ソグド語を初めとする中世イラン語の文献言語学的研究
	杉 本 淑 彦	現代文化学専攻 現代文化学講座	フランス社会におけるエジプト遠征の記憶化に関するメディア的研究
教育学研究科	矢 野 智 司	教育学環専攻 教育・人間科学講座	生成と発達の教育人間学的研究
	桑 原 知 子	教育学環専攻 臨床心理学講座	「もう一人の私」と心理臨床に関する実践的研究
法学研究科	高 木 光	法政理論専攻 公法講座	行政法に関する研究, とりわけ, 行政訴訟, 行政手続, 実効性確保手法などの研究
	二本松 利 忠	附属法政実務交流センター 法科大学院準備部門	民事紛争解決制度, 特に民事訴訟における実務上の諸問題に関する研究, 法曹実務教育に関する研究
経済学研究科	宇 仁 宏 幸	経済学専攻 経済理論講座	制度に関する経済理論の研究およびそれに基づく現代資本主義の動態の実証研究
	塩 地 洋	経済学専攻 現代経済学講座	自動車産業の国際比較研究
理学研究科	畑 政 義	数学・数理解析専攻 解析学講座	超越数, ディオファントス近似, 特異関数, 自己相似集合に関する研究
	福 田 洋 一	地球惑星科学専攻 固体地球物理学講座	測地学, 特に地上での精密重力測定, 衛星データ解析等による地球重力場の時間的・空間的变化に関する研究
	余 田 成 男	地球惑星科学専攻 大気圏物理学講座	気象力学・気候力学・地球流体力学に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
理学研究科	馬 場 正 昭	化学専攻 物理化学講座	高分解能レーザー分光法と基礎理 および第一原理理論計算による分 子構造の精密決定に関する研究
	大須賀 篤 弘	化学専攻 有機化学講座	ポルフィリンの構造有機化学的研究
	柴 田 一 成	附属天文台	太陽宇宙プラズマ物理学：太陽・ 宇宙のさまざまな爆発現象（フレ アやジェット）をプラズマ物理学 を用いて研究
医学研究科	富 樫 かおり	医学専攻 放射線医学講座	MRによる婦人科領域画像診断およ び動態 MR 概念の確立とそれを用 いた子宮の病態解明に関する研究
	福 原 俊 一	社会健康医学系専攻 健康解析学講座	臨床疫学研究 Patient Reported Outcomes の 測定と疫学研究への応用に関する 研究
	桂 敏 樹	人間健康科学系専攻 地域看護学講座	生活習慣病・介護予防、健康増進、 健康施策の立案評価、小児期から の健康な街づくり、現任保健師育 成の研究
	三 谷 章	人間健康科学系専攻 作業療法学講座	脳機能リハビリテーションの神経 科学的研究
医学部附属病院	清 水 章	臨床研究総合センター	免疫系の遺伝子構造および発現調 節機構に関する研究、アカデミア における医療開発基盤の構築に関 する研究
	横 出 正 之	臨床研究総合センター	臨床研究の実践にかかる体制構築 に関する研究、動脈硬化性疾患の 発症機構の解明とその予防の研究
	松 原 和 夫	薬剤部	パーキンソン病発症機構と治療薬 の探索、抗がん剤副作用の発現と 予防・治療法、薬剤師業務評価に 関する研究
工学研究科	竹 山 聖	建築学専攻 建築設計学講座	建築という思考に関する臨床建築 学的研究
	北 村 隆 行	機械理工学専攻 物性工学講座	材料の力学物性に関する研究
	稲 室 隆 二	航空宇宙工学専攻 航空宇宙基礎工学講座	流体力学に関する研究、特に格子 ボルツマン法による複雑境界およ び移動境界流れの数値計算法
	松 原 英一郎	材料工学専攻 材料設計工学講座	放射光・X線自由電子レーザーに よるランダム系物質、ナノ金属・無 機材料の構造と物性に関する研究
	梅 田 真 郷	合成・生物化学専攻 生物化学講座	生体膜の構造と機能に関する研究
農学研究科	高 部 圭 司	森林科学専攻 生物材料機能学講座	木材細胞壁の形成メカニズムと微 細構造の研究
	喜 多 恵 子	応用生命科学専攻 分子細胞科学講座	細菌の核酸分解酵素に関する分子 生物学的研究
	加 納 健 司	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	酸化還元酵素機能電極反応に関す る研究
	豊 原 治 彦	応用生物科学専攻 海洋生物生産学講座	海洋生物の生理・生態の解明とそ の有効利用に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農学 研究科	赤 松 美 紀	比較農業論講座	医農薬の化学構造と活性との相関関係に関する研究
	縄 田 栄 治	地域環境科学専攻 生産生態科学講座	熱帯地域における農業および農業環境、農業資源に関する研究
	小 田 滋 晃	生物資源経済学専攻 農企業経営情報学講座	農業経済学、農業経営学、農業会計学、農業情報学、ワイン・ビジネス論、六次産業化論等に関する研究
人間・環境学 研 究 科	松 田 英 男	共生人間学専攻 人間社会論講座	英文学・英米映画のジャンルと形式についての研究
	岡 田 温 司	共生人間学専攻 思想文化論講座	イタリアを中心とする芸術および思想史の諸問題に関する研究
	水 野 尚 之	共生人間学専攻 思想文化論講座	アメリカ文学に関する研究、ヘンリー・ジェームズの伝記的研究や翻訳、注釈作成、および同時代作家研究
	服 部 文 昭	共生人間学専攻 言語科学講座	スラヴ諸語に関する機能論的ならびに文献学的研究
	水 野 眞 理	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	イギリス詩人エドモンド・スペンサーを中心とする英文学史におけるロマンス的想像力に関する研究
	元 木 泰 雄	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	日本中世前期の政治史に関する研究
エネルギー科学 研 究 科	星 出 敏 彦	エネルギー変換科学専攻 エネルギー機能設計学講座	金属材料の疲労およびセラミックス系材料の強度に関する破壊力学的評価とシミュレーション解析に関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	岩 田 明 久	東南アジア地域研究専攻 生態環境論講座	東・東南アジア、インド・西太平洋域の魚類に関する研究、日本・東南アジアの生物多様性保全に関する研究
	池 野 旬	アフリカ地域研究専攻 生業生態論講座	東アフリカ農村の社会経済的変容に関する研究
情報学 研究科	西 田 豊 明	知能情報学専攻 認知システム講座	会話情報学
	西 村 直 志	先端数理科学専攻 応用数理学講座	計算力学、応用力学、計算電磁気学の研究
生命科学 研究科	HEJNA, James Alan	高次生命科学専攻 生命科学教育学・遺伝学講座	Genetics, DNA repair, science communication.
総合生存学館	山 口 栄 一	総合生存学専攻	イノベーション理論およびイノベーション政策科学の研究
経営管理 研究部	河 野 広 隆	経営管理講座	社会資本のアセットマネジメントに関する研究 コンクリート構造物の設計・施工・維持管理に関する研究
化学 研究所	岩 下 芳 久	附属先端ビームナノ科学センター	宇宙の成り立ちや物質の極限状態を知るための特殊粒子ビーム生成や操作に関するビーム物理・加速器研究
	阪 部 周 二	附属先端ビームナノ科学センター	高強度レーザーと物質との相互作用の物理とその応用、量子ビーム発生、レーザープロセッシングに関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人文科学研究所	藤井 正人	文化研究創成研究部門	ヴェーダ文献の生成と伝承の研究
	武田 時昌	文化表象研究部門	中国科学思想史研究 汎アジア科学比較文化論
ウイルス・再生 医科学研究所	藤田 尚志	ウイルス感染研究部門	ウイルスに対する自然免疫学
	中村 達雄	再生組織構築研究部門	胸部外科学ならびに再生医学と in situ tissue engineering の研究
エネルギー 理工学研究所	神保 光一	エネルギー機能変換研究部門	加速器物理における理論、および実験による研究
	木下 正弘	附属エネルギー複合機構研究センター	生体系における自己組織化および秩序構造形成機構の解明を目指した統計力学理論に基づく研究
生存圏研究所	金山 公三	生存圏開発創成研究系	木質系材料の物性制御ならびに変形加工に関する研究
防災研究所	大志万 直人	地震防災研究部門	地殻活動に関わる局所的地磁気変化に関する研究、および、地球内部の電気伝導度に関する研究
	千木良 雅弘	地盤災害研究部門	山地解体過程と山地災害に関する研究
数理解析研究所	齋藤 盛彦	応用数理研究部門	ホッジ加群および代数解析学の研究
	山田 道夫	応用数理研究部門	流体力学・非線形力学の理論的・数値的研究 関連する数学的手法とその応用に関する研究
複合原子力科学 研 究 所	大槻 勤	粒子線基礎物性研究部門	さまざまな物質や微粒子の元素分析と生成メカニズムの研究、核反応機構や同位体製造利用の放射化学的研究
	田野 恵三	放射線生命科学研究部門	逆遺伝学的手法による DNA 損傷修復機構の研究
霊長類研究所	正高 信男	認知科学研究部門	言語を含めたヒトのコミュニケーションの起源と進化に関する実証的研究
東南アジア地域 研究 研 究 所	安藤 和雄	相関地域研究部門 実践型地域研究推進室	アジアと日本の農村地域における農業生態と技術および社会の発展に関する地域研究
フィールド科学教育 研 究 セ ン タ ー	山下 洋	里域生態系部門	沿岸資源生物の生態学的研究、および河口・沿岸生態系に及ぼす陸域での人間活動に関する森里海連環学研究
国際高等教育院	奥本 裕	生物学教室	イネの出穂開花性に関する遺伝解析
	佐藤 智	生物学教室	生体膜タンパク質とリン脂質の構造機能に関する生物物理学的研究
	青谷 正妥	附属日本語・日本文化教育センター	作用素環・積系 量子力学（時間反転） 環境科学（昆虫・両生爬虫類） 第二言語習得（脳科学・統計学）
環境安全保健機構	川村 孝	健康管理部門	身近な疾患の予防と治療の有効性の検証 臨床研究の方法論の普及・啓発

(総務部(人事課))

[目次に戻る](#)



第12回次世代グローバルワークショップを開催

アジア研究教育ユニットは、10月25日(金)～26日(土)に本部構内文学部校舎にて第12回次世代グローバルワークショップを開催しました。今回は2日間で8か国からの海外参加者20名を含む合計43名が参加し、「不平等 (Inequalities)」をテーマに、社会学、文学、哲学など人文・社会科学の観点から研究発表および討論を行いました。また、今回は9名の教員による2つのパネルディスカッションも実施しました。

落合恵美子 アジア研究教育ユニット長、湊 長博 プロボスト 理事・副学長からの挨拶を行った後、エスニシティと不平等、不平等と倫理、植民地主義・ポスト植民地主義と不平等、宗教・カーストとジェンダー、ジェンダーと権力、暴力の分科会に分かれ、海外参加者を含む20名の大学院生等による研究報告が行われました。報告者は学内外の教員からのコメントを得るなど、自らの研究を研鑽する貴重な機会を得ました。

参加者からは「他の報告の問題意識の鋭さに大いなる刺激を受けた」、「多分野の専門にまたがる会議を堪能した」、「これからもワークショップの参加者として京都大学を訪問する機会を楽しみにしています」といった声が寄せられました。

アジア研究教育ユニットでは、次世代の研究者が英語で学術交流を行いやすい環境作りに力を入れてきました。このワークショップをきっかけに、多くの若手研究者が世界に羽ばたいていくことを願います。



研究発表の様子



パネルディスカッションの様子



集合写真

(大学院文学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



経済学部創立100周年記念行事を開催

経済学部では、創立100周年を記念して10月19日(土)に、記念シンポジウム、記念式典および祝賀会をウェスティン都ホテル京都において開催しました。記念式典には、総長、理事、副学長、部局長、名誉教授、現教職員ほか、経済学部に関わりのある関係者など、約400名が参加しました。

まず、記念シンポジウムでは、各界で活躍する卒業生をパネリストとして迎え、『『人材育成』における京都大学経済学部の役割』と題したパネル・ディスカッションを行い、活発な意見交換を行いました。

記念式典では、京都大学交響楽団のメンバーによる弦楽四重奏の演奏の後、江上雅彦 経済学研究科長が挨拶を述べました。続いて山極壽一 総長、小塚修一郎 経済学部同窓会会長、山本敬三 法学研究科長、レイモンド・G・ストークス グラスゴー大学経営史研究センター所長、門川大作 京都市長より祝辞がありました。

祝賀会では、宇野 輝 経済学部特任教授、森棟公夫 名誉教授の祝辞に続き、和田紀夫 日本電信電話株式会社 (NTT) 特別顧問の発声で乾杯を行い、学生のアカペラサークル「Crazy Clef」によるコーラスなど、終始和やかな雰囲気の中、最後に文 世一 前研究科長の挨拶により、盛会のうちに終了しました。



式典参加者の集合写真

(大学院経済学研究科)

[目次に戻る](#)

2019年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

医学部附属病院は、去る10月18日(金)に2019年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企図することを目的として年1回、定例総会を開催しているものであり、学内外から160名余りが参加しました。

定例総会では、宮本 享 病院長の開会挨拶および「京大病院の現状について」の話がありました。引き続き、森本尚樹 教授(形成外科長)、長尾美紀 教授(検査部長)より新任者挨拶、横井秀基 講師(腎臓内科)、滝田



講演する宮本病院長

部局の
動き

順子 教授(小児科長), 村井俊哉 教授(精神科神経科長) より各診療領域の「新専門医制度について」, 平木秀輔 助教(医療情報企画部) より「実践的医療経営プロフェッショナル教育プログラム(KUMAHOPE)の紹介について」, 小西靖彦 教授(医学研究科医学教育・国際化推進センター臨床教育部門長) より「臨床実習について」, それぞれ報告が行われました。



講演する三輪病院長



講演する平岡院長

続いて, 京大病院と関係病院との今後の関わりについて, 宮本病院長, 三輪聡一 公立豊岡病院組合豊岡病院長, 平岡真寛 日本赤十字社和歌山医療センター院長より, それぞれ講演が行われました。さらに質疑応答では, 関係病院の先生方との活発な意見交換が行われるなど, 充実した定例総会となりました。

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

第8回国際シンポジウム「総合生存学とアジアのSDGs」を開催

総合生存学館(思修館)では, 第8回国際シンポジウム「総合生存学とアジアのSDGs」を11月7日(木)に国際科学イノベーション棟にて開催しました。

今回のシンポジウムでは, 学生と教員とが協力して企画・運営を行い, 口頭やポスターで合計11名の大学院生が発表を行いました。司会を務めたのは, 総合生存学館大学院1回生の李 曉林さんとネグラオン・シュバ・チアゴさんです。

シンポジウムは, 寶 馨 総合生存学館長の挨拶で始まり, ベンノ・ボア 国連教育科学文化機関 (UNESCO) バ



寶学館長



ボア部長



ウタマ所長



萱島理事

部局の
動き

ンコク自然科学部長，ヌキ・ウタマ ASEANエネルギーセンター所長，萱島信子 独立行政法人国際協力機構（JICA）理事により基調講演が行われました。その後、「総合生存学の取り組み」および「アジアのSDGsの課題と解決策」という2つの学生発表セッション，ならびにパネルディスカッションを行いました。

パネルディスカッションでは，チャールズ・ボリコ 国連食糧農業機関（FAO）日本事務所所長およびセプティア・スペンディ ASEANエネルギーセンタープログラム長，本学館の山敷庸亮 副学館長，金村 宗 准教授が登壇し，「アジアのSDGsのためアカデミアは何をなしうるか」をテーマに活発な議論を交わしました。

最後に，寶学館長による全体の総括があり，盛況のうちに終了しました。



学生発表セッション（総合生存学館 田中勇伍さん）



学生発表セッション（農学研究科 キョ シュンイさん）



学生発表セッション（生命科学研究科 ジョウ チュウイーンさん）



パネルディスカッション（左から、山敷副学館長、ボリコ氏、スペンディ氏、金村准教授）



ポスターセッション



フォトセッション

（大学院総合生存学館（思修館））

[目次に戻る ↗](#)



第2回マヒドン大学 On-site Laboratory ワークショップを開催

11月25日(月)、第2回マヒドン大学 On-site Laboratory ワークショップを、吉田キャンパスおよび桂キャンパスで開催しました。このワークショップは、地球環境学堂提案の「Mahidol 環境学教育・研究拠点」が京都大学 On-site Laboratory として採択されたことを契機に始まったもので、2019年3月8日(金) マヒドン大学(タイ) で開催された第1回に続くものです。今回は、マヒドン大学から Watcharra Chintakovid 副学長補佐、Pornchai Chanyagorn 副工学部長ら15名が出席するとともに、京大側から総勢29名の教員が参加しました。

ワークショップは、全員が一斉に参加する第一部と、「環境工学」、「化学工学」、「農学」、「公衆衛生」の4分野に分かれた第二部の二部構成で開催されました。

第一部は午後1時から吉田キャンパス総合研究5号館大会議室で開催され、遠隔会議システム(VCS)とスライド共有ソフトZoomにより桂キャンパスにも遠隔中継されました。出席者全員の自己紹介の後、藤井滋穂 地球環境学堂教授が、On-site Laboratory 事業の経緯と概要、およびこれまでの両大学の交流、さらに本ワークショップの趣旨を説明しました。続いて、環境工学、化学工学、農学、公衆衛生各分野で、本学とマヒドン大学の両者から教育・研究の紹介がありました。本学は地球環境学堂、工学研究科、農学研究科、医学研究科の4部局、マヒドン大学は工学、公衆衛生、環境資源研究、学際研究の4学部から参加があり、多様な研究分野の関係者が一堂に会し教育研究を討議する機会はそれぞれの大学内でも少なく、貴重な情報交換の場となりました。

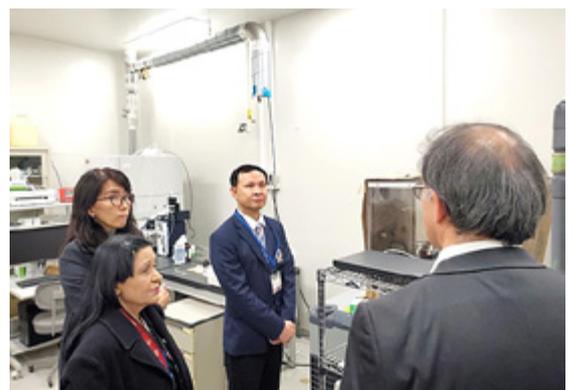
第二部、「環境工学」分野と「化学工学」分野は、まず一緒に吉田キャンパスにある地球環境学堂の環境調和型産業論分野と社会基盤親和技術論分野の実験室を見学した後、連絡バスで桂キャンパスに移動しました。「環境工学」分野では、Nawatch Surinkul マヒドン大学土木環境工学学科学科長ら4名が、西村文武 工学研究科准教授らの案内のもとCクラスターの環境工学共通実験室、環境試料分析装置等を見学し、米田 稔 工学研究科教授ら6名の本学教員と、研究紹介および研究協力の可能性について討議しました。一方、「化学工学」分野は、佐野紀彰 工学研究



ワークショップ第一部での研究説明の様子



ワークショップ第一部終了後の集合写真



環境工学分野の実験室(桂Cクラスター地下)の見学風景

部局の
動き

科教授の案内のもと、A クラスターの界面制御工学、反応工学、分離工学の3つの研究室を見学した後、化学工学談話室でSakhon Ratchahat マヒドン大学講師ら2名と本学8名の教員による懇談会を行いました。

「農学」分野は、神崎 護 農学研究科教授の案内のもと、Watcharra Chintakovid マヒドン大学助教授ら4名が、農学研究科の生物材料設計学、森林生態学、作物学、森林・人間関係学、森林水文学の5つの研究室を訪れました。

本学教員から研究内容の紹介を受け、実験や分析機器を見学し、今後の教育研究での協力や修士課程ダブルディグリープログラムの設置について意見交換を行いました。

さらに、「公衆衛生」分野では、原田浩二 医学研究科准教授の案内のもと、Arthit Phosri マヒドン大学講師ら4名が、医学研究科の環境衛生学実験室と化学物質研究生体試料バンクを見学の後、医学部先端科学研究棟セミナー室で本学教員8名による懇談会を行いました。

2020年2～3月には第3回ワークショップがマヒドン大学で実施予定であり、教育・研究の両大学の連携がさらに進むと期待されます。



公衆衛生分野の実験室見学風景

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

インドネシア共和国のIPB大学 Arif Satria 学長が京都大学を表敬訪問

インドネシア共和国のIPB大学(旧ボゴール農業大学、昨年IPB大学と改称)からArif Satria 学長らが、11月28日(木)に京都大学を表敬訪問されました。訪問者は、Arif学長、Anas Miftah Fauzi 大学院研究科長(Dean of Graduate School)ら5名と、11月26日(火)～28日(木)に吉田キャンパスで開催された地球環境学堂主幹の「京都大学国際シンポジウム—東南アジアにおける地球環境学の展開—」に出席されていたErnan Rustiadi 教育プログラム部長(Head of Study Program)の6名です。

一行は、神崎 護 農学研究科教授らの出迎えを受けた後、飯田訓久 教授からフィールドロボティクス分野、近藤 直 教授から生物センシング工学分野の研究紹介を受けるとともに、その実験室を訪問しました。

続いて、百周年時計台記念館の迎賓室で京都大学本部役員らとの表敬訪問・面談に臨まれ、稲葉カヨ 理事・副学長、村上章 農学研究科長、舟川晋也 地球環境学堂長、縄田栄治 ASEAN拠点長ら5名が出席するとともに、IPB大学とのダブルディ



IPB大学 Arif学長との面談の様子

部局の
動き

グリー生らIPB大学関係の学生ら6名が陪席しました。面談では、両大学の教育研究プログラムがそれぞれ紹介されるとともに、今後の交流活発化のための議論が進められました。記念品交換と写真撮影の後、迎賓室で昼食をとりながら懇談を行いました。

IPB大学とは、2015年の海外オフィスの設置、2018年度からはダブルディグリープログラムの実施や京都大学国際シンポジウムの実施、山極壽一 総長の表敬訪問など、これまでも親密な教育・研究の連携を実施してきており、今後もこのような交流がさらに進展するものと期待されます。



面談後の記念写真（右から5人目が Arif 学長）

(大学院地球環境学堂)

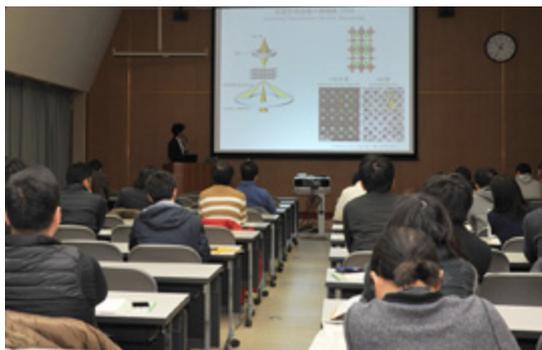
[目次に戻る ↗](#)

化学研究所「第119回研究発表会」を開催

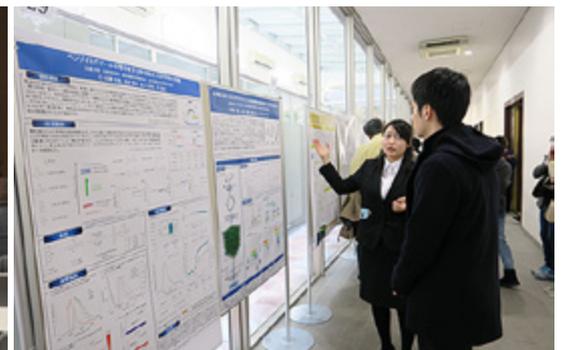
化学研究所は、12月13日（金）に宇治キャンパスの共同研究棟大セミナー室において、第119回研究発表会を開催しました。

冒頭、辻井敬亘 所長より「この研究発表会は長い歴史を持っている中、現在は、化研のアクティビティを発信する場としてますますその重要性を増しています。先般行われた外部評価委員会でも、若手研究者の活発な研究活動を高く評価いただきました。若手の方々にはぜひ、本発表会を通じて一層研究を発展させてもらいたい」といった挨拶がありました。

午前の部では、河野健一 助教による「構造活性相関研究に基づく膜曲率認識ペプチドの開発」、治田充貴 准教授による「電子顕微鏡による高空間分解能元素・電子状態解析」の講演が行われた後、京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞の授与式ならびに受賞者3名による講演が行われました。また同棟ライトコートでは60件のポスター発表が開催され、いずれのセッション



口頭発表会場



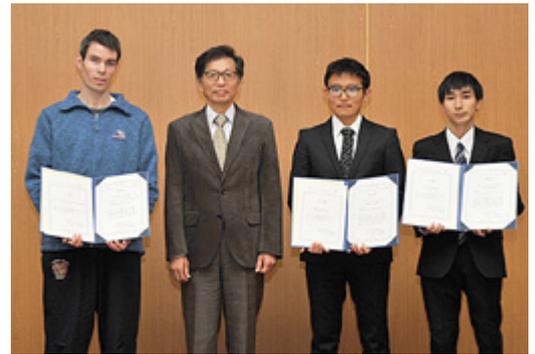
ポスター発表会場

部局の
動き

ンも活発な質疑応答が行われ、熱のこもった発表会となりました。

午後の部では、まず「化研らしい融合的・開拓的研究」で異分野間の共同研究をすすめる若手研究者4名による成果報告がありました。その後、佐藤慎一 准教授による「RNAツールを利用した生体高分子の生細胞内動態観察」、Richard MURDEY 助教による「屋内光下でのペロブスカイト太陽電池の特性評価」、竹中幹人 教授による「ガラス状物質における延伸誘起密度揺らぎ」と題した講演が行われました。

本研究発表会は、一般、関連研究機関、所内から延べ130名を超える参加者を得て、最先端の多彩な研究成果の分かりやすい発表と活発な討論により盛況のうちに終了しました。なお、終了後には同研究所所属の教職員・大学院生ら多数が参加して、宇治生協会館にて本会の懇親会が行われました。



辻井所長と受賞者3名

(化学研究所)

[目次に戻る](#)

ワイルド&ワイズ「SDGs へ向けた森林と人間の共生」共学教育プログラムを実施

2019年度ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業に採択された「SDGs へ向けた森林と人間の共生：奥山・里山の暮らしと木から生まれる文化」（フィールド科学教育研究センター主催、森里海連環学教育研究ユニット共催）を10月11日（金）～22日（火）に実施しました。

国際交流協定（MOU）を締結しているミャンマー林業大学から9名の学生および引率教員1名が、10名の本学学生（公共政策大学院1名、文学部1名、教育学部1名、経済学部2名、農学部5名）とともに英語講義やフィールドトリップに取り組みました。日本・ミャンマーともに古くから木の利用や文化を発展させてきた国であり、現状を肌で感じることで、将来の森林や生態系管理、さらにセンターのミッションでありSDGsにつながる森里海連環の考え方について、より広い視野で学ぶことができるプログラムとなっています。

開会式、ガイダンス、歓迎会で幕を開け、さまざまな英語講義およびゼミへの参加、修学院



修学院離宮隣雲亭にて



無鄰菴において加藤友規 京都造形芸術大学教授より日本庭園の説明

部局の
動き

離宮や日本庭園「無鄰菴」の見学，上賀茂試験地および芦生研究林での実地観察などを積極的にこなし，ミャンマーと日本の学生たちは時に熱い議論を展開しました。特に，芦生研究林では，夜にミャンマー料理が振舞われ，それをきっかけとして交流を深めることができ，遠慮があった学生間の距離もさらに近づきました。



芦生研究林における説明



英語講義受講風景



組紐体験の様子



池坊会館においていけばな体験



着物着付け体験



北山丸太を担いでみました



最後に全員で記念撮影，ミャンマーの学生たちは民族衣装で出席



修了証の授与



日本文化体験では、和装、茶道・華道、組紐作りを体験し、また、金閣寺や清水寺を訪れました。特に、着物は印象深かったようで、雨の中でも1日着物で過ごしました。

最終日には、参加者全員による報告会を行いました。最後に、徳地直子 フィールド科学教育研究センター長から修了証の授与があり、約2週間にわたるプログラムを終了しました。

(フィールド科学教育センター・森里海連環学教育研究ユニット)

[目次に戻る](#)

フィールド科学教育研究センターが環境省自然環境局と連携協定を締結

森里海連環学の研究に取り組むフィールド科学教育研究センターと、地域循環共生圏づくり(森里川海プロジェクト)を実施する環境省自然環境局は、ともに「森から海までのつながりを取りもどし、その恵みを引き出しながら豊かに暮らせる社会を構築していくこと」を目指し、そのつながりの科学的な解明や、市民・地域と連携した社会活動を展開しています。

目標を同じくする両者は、今後、連携協力することで、より効果的に取り組みを推進していくことになりました。そこで、12月13日(金)に本学において、両者による連携協定締結式を行い、山下 洋 森里海連環学教育研究ユニット長が見守る中、徳地直子 フィールド科学教育研究センター長および鳥居敏男 環境省自然環境局長が協定書にサインしました。

締結式では、徳地センター長から本締結への経緯や今後の取り組みについて説明があり、2018年に策定された我が国の第5次環境基本計画における循環型社会に向けた各重点戦略の推進への寄与が期待されるとの挨拶がありました。

今後は、両者の研究や事業成果の活用、またシンポジウム等での市民への持続可能な社会に向けた教育、啓発活動の実施等で連携していくこととなっています。

【関連資料】

- ・京都大学フィールド科学教育研究センターと環境省自然環境局との協定説明資料

森里海連環の再生及び地域循環共生圏の実現に向けた連携・協力に関する協定

具体的な連携・協力について

森里海連環学の研究に取り組むフィールド科学教育研究センターと、地域循環共生圏づくり(森里川海プロジェクト)を実施する環境省自然環境局は、ともに「森から海までのつながりを取りもどし、その恵みを引き出しながら豊かに暮らせる社会を構築していくこと」を目指し、そのつながりの科学的な解明や、市民・地域と連携した社会活動を展開しています。目標を同じくする両者は、今後、連携協力して、普及啓発や研究・事業を行うことで、より効果的な推進を図ることとしました。

1. 普及啓発における連携

(1) シンポジウム等の共催・相互参画・周知による情報発信の強化等

< 2019年度内に予定されているシンポジウム等 >

- ・3月21日 京都大学・日本財団森里海シンポジウム 等

(2) 双方の情報発信ツール(SNS等)を活用した情報発信の強化

双方の研究や事業の成果などを、双方がもつ様々な情報発信ツールを相互に活用し、より多様な主体へ情報発信を強化。HP、SNS等。また、関係者と連携して実施するイベント等。

(3) 双方の情報発信資料等を活用した情報発信の強化



双方が作成した情報発信資料，展開するキャンペーン等を相互に活用・発信
2. 研究成果及び事業成果の共有

両者は，森里海連環及び地域循環共生圏の構築に向けて，相互に関わりの深い研究・事業を実施しており，双方で得た知見等を共有化することで，研究・事業の効果的な実施やさらなる成果を期待。

(1) 京都大学フィールド科学教育研究センターの研究等（平成30年度～）

- ① 森里川海の分断/連続と人間活動や生物多様性との関係性を解析。
- ② 各地の多様な主体との協働による森里海連環の再生に向けた取り組み（京都府南丹市美山町等）。
- ③ 森里川海の様々な課題に気づき，行動に移していく教育活動を全国で展開。

(2) 環境省の事業

- ① 地域循環共生圏づくりモデル事業等（平成28年度～）
- ② 地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業（令和元年度～）
- ③ 環境DNA技術を用いた淡水魚類の分布調査手法の標準化（平成30年度～）
- ④ 社会・生態システムの統合化による自然資本・生態系サービスの予想評価（平成28年度～令和2年度）



サインの様子



締結後の記念写真

(フィールド科学教育研究センター・森里海連環学教育研究ユニット)

[目次に戻る ↗](#)

高等研究院 iCeMS が、アブドラ王立科学技術大学と MOU を締結

高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS = アイセムス) は，サウジアラビアのアブドラ王立科学技術大学 (KAUST) と学術交流協定 (MOU) を締結し，東京にて開催された「日・サウジ・ビジョン2030 ビジネスフォーラム」にて，菅原一秀 経済産業大臣，マジッド・アル・カサビ サウジアラビア商業投資大臣，ナーイフ・マルズーク・アル・ファハーディ 駐日サウジアラビア王国大使他関係者立ち会いのもと，学術交流協定交換式を10月23日(水)に行いました。

交換式には，本学からは，北川 進 高等研究院特別教授・iCeMS 拠点長が出席し，アブドラ王立科学技術大学からは，ドナル・ブラッドレイ 副学長，ナジャーハ・アシュリー 副学長が出席しました。

アブドラ王立科学技術大学は，世界レベルの技術研究と女性の教育機会向上を目指して



2009年に開校しました。優れた研究者を世界から招聘し、最先端の機器を揃えて研究・教育を行っています。

iCeMSと同大学の研究者間の交流から発展した研究協力を、今後は組織間国際共同研究へと強化させるため、今回の学術交流協定締結へと至りました。2020年には京大-KAUST最先端エネルギー材料シンポジウムの開催も予定しています。

今後の展望として、iCeMSで開発された最先端エネルギー材料の基盤技術を用い、京都大学ではその基礎学問を深化させてゆく一方、アブドラ王立科学技術大学側ではそれらを利用し、より応用に近い研究を担当することによって、新たな材料の可能性を発展させていくことを目指しています。

【関連リンク】

高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)

<https://www.icems.kyoto-u.ac.jp/ja/>

アブドラ王立科学技術大学

<https://www.kaust.edu.sa/en>



写真：前列左からアシュリー副学長、北川拠点長

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

高等研究院 iCeMS は ZEISS-iCeMS イノベーションコア 開所記念式典を開催

高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS = アイセムス) は、カールツァイスマイクロスコピー社 (ドイツ) とともに共同技術開発拠点「ZEISS-iCeMS イノベーションコア」を設立し、その開所記念シンポジウムおよび調印記念式典を10月28日 (月) に開催しました。

同拠点では、発売前の顕微鏡機器を用いて研究し、同時に機器の性能評価を行うことで世界最先端の生細胞イメージング技術を開発します。また、最新のツァイス顕微鏡を共用機器として学内外にも提供します。

iCeMSは2018年度に、文部科学省の設備共用化促進事業の一つとして開始された「先端研究基盤共用促進事業 新たな共用システム導入支援プログラム (新共シス)」の拠点として京都大学で初めて選出され、先端機器の保守・更新を行いながら学内外の共同利用を促進するシステム構築に尽力してきました。同拠点の設置はこの新共シスの取り組みの一環でもあり、共

部局の
動き

同研究契約、共同開発室発足を目指してカールツァイスマイクロコピー社と2年間協議を重ね、この度、iCeMS内に開設されることとなりました。

28日のシンポジウムでは、田中耕一郎 iCeMS連携PI、渡邊直樹 医学研究科教授、影山龍一郎 iCeMS連携PIの3名の研究者が顕微鏡を用いた生命科学研究についてそれぞれ発表を行いました。



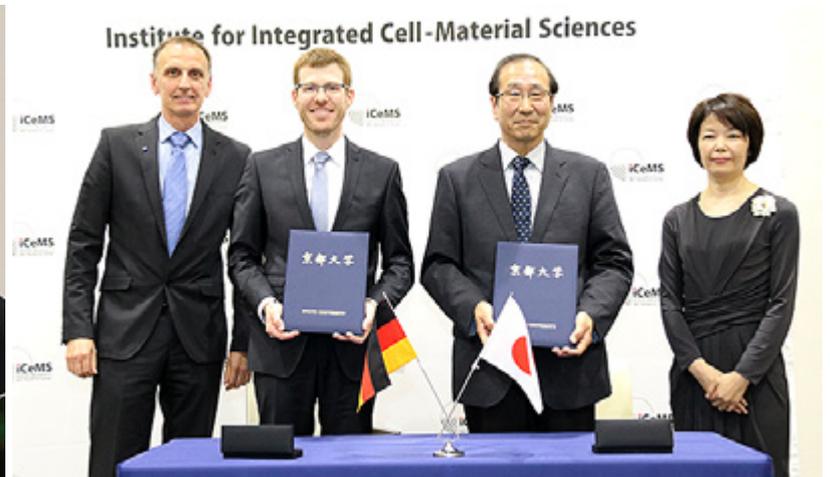
シンポジウムに登壇した（左から）田中連携PI、渡邊教授、影山連携PI



挨拶する（左から）アルビツ社長、ツィーママン氏、湊プロボスト 理事・副学長、北川拠点長



挨拶する見学副拠点長



署名した協定書を手に笑顔の（左から）ツィーママン氏、アルビツ社長、北川拠点長、見学副拠点長

部局の
動き

シンポジウムの後には開催された式典では、カールツァイスマイクロコピー社からミヒャエル・アルビツ 社長とベルンハルト・ツィマーマン シニアダイレクターが、京都大学からは湊 長博 プロボスト 理事・副学長、北川 進 高等研究院特別教授・iCeMS 拠点長がそれぞれ挨拶し、最後に見学美根子 iCeMS 副拠点長・解析センター長が「これからの細胞生物学の発展には4D イメージング技術が欠かせない。iCeMSの最先端の生物学研究とツァイスの顕微鏡技術の融合で、イメージング技術の発展に貢献できることを嬉しく思う」と、新拠点の設置について喜びを述べました。

式典の最後には、カールツァイスマイクロコピー社とiCeMSの関係者約60人が見守る中、北川拠点長とアルビツ社長が連携協定に調印を行いました。

式典終了後にはレセプションが行われ、ドイツと日本の参加者らはイメージング技術と生命科学の今後の発展について意見交換を行いました。

【関連リンク】

高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)

<https://www.icems.kyoto-u.ac.jp/ja/>

文部科学省：平成30年度先端研究基盤共用促進事業（新たな共用システム導入支援プログラム）公募採択機関の決定について

http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/shisetsu/1405795.htm



メディアから取材を受ける iCeMS とツァイスの関係者



レセプションで意見交換する iCeMS とツァイスの関係者ら



参加者集合写真

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

ラグビーワールドカップに見た日本の将来像

堀田 徹哉



昨年、日本でラグビーワールドカップが開催され、2試合を観戦する幸運に恵まれました。これまでラグビーに縁遠かった私ですが、その素晴らしさに魅了され、すっかり「にわか」ファンになってしまいました。とりわけ日本代表チームの快進撃は世界の注目を集めました。海外出張の都度、外国の仲間の多くが日本代表を称賛してくれました。身体的な強さが優劣を大きく左右するラグビーで、日本が世界の強豪を相手に全く引けを取らない戦いを繰り広げる姿には、大きな興奮と感動を覚えました。

さて、ラグビー日本代表チームの特徴の一つに、外国出身選手の多さがあります。少し調べたところ、ブレイブブロッサムズ31名は実にその過半の16名が海外出身、うち7名は母国籍のまま日本代表としてプレイしています。これはラグビーが、一定の条件を満たせば、どの国でプレイするかを選手の国籍に依らず選択できる制度を採っているからだそうです。ただし、一度ある国の代表に入ると、二度と他国の代表としてはプレイできず、選手は大変重い選択を迫られることになります。この外国出身選手の多さには違和感を唱える声もあり、一部で論議を呼びました。「このチームが果たして日本代表と言えるのか？」というものです。しかし私には、このモデルこそが今後の日本のあるべき姿を示しているように思えます。

少子化による人口減少により、今後の日本は労働力不足と国内マーケットの縮小が懸念されています。これに対して日本が成長力を持続するためには、外国人労働力を取り入れることが不可欠と言われます。そのためには、より多くの優秀な外国人に、日本で、とりわけ日本企業で働くことを選択してもらう必要があるでしょう。その意味で、ラグビー日本代表チームは、まさにこれからの日本に求められる組織の先駆けと言えるのではないのでしょうか。こう考えると、昨年の流行語大賞となった「ワン・チーム」は、ラグビーだけに留まらず、今後の日本の持続的成長のキーワードにも聞こえてきます。出身国や国籍に捉われず、日本で働くことを選択した多様な人々が、一つとなって高い成果を創出していく成長モデル、その象徴としての”One Team”です。

私事ですが、卒業後11年間日本企業に勤務した後、欧米企業に転じて今日に至っております。30歳から2年間、米国の大学院で学びましたが、この経験がその後のキャリア選択に大きな影響を与えています。今、京大では留学生が増加していると伺いました。その中には、卒業後日本企業への就職を志望する学生も少なくないことと推察します。京大での学生生活を通して、留学生たちは何を学び、どのような経験を積んでいるのでしょうか。京都大学が優秀な日本人人材を輩出することは言うに及ばず、日本に敬愛と愛着を持ち、日本企業でキャリアを歩むことを選択し、今後の日本の成長を支えてくれる、優秀な外国人を多数輩出することにも期待したいと思います。

(ほった てつや, SAS Institute Japan 株式会社 代表取締役社長, 昭和62年工学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

小麦蛋白質の
異分野共同研究始め

名誉教授 裏出 令子



小麦は、世界で人類が摂食する全エネルギー及び全蛋白質の約20%を供給する最も重要な食料資源の1つである。小麦がパンやうどんなど様々な食品として食されている理由の1つは小麦粉から作る生地の特徴の優れた食品物性にあり、その物性を生み出すグルテンを筆者は研究対象としてきた。

グルテンは1745年にポーロニャ大学のBeccariによって発見された長い研究の歴史を持つ蛋白質複合体である。しかしグルテンは水に不溶性で高濃度の蛋白質の塊（凝集体）として存在するため、現在の蛋白質分析法では構造解析が難しく原子及び分子レベルでの構造研究はほとんど進んでいない。筆者も研究手法が限られていることに焦燥感を抱きながら、研究に取り組んできた。

ところが今から十数年前に、実験の本来の目的から外れたある現象に遭遇し小麦の主要蛋白質の1つグリアジンを水に溶けた状態で効率的に抽出する方法を発見した。これが、新しい研究を進展させるきっかけとなった。その後、材料科学分野で量子ビームを用いて様々な状態の物質の分子レベルでの構造解析が行われていることを知り、今までに報告例がない量子ビームを用いた小麦蛋白質の研究を始めようと思い立った。

すぐに、食品蛋白質に興味を持ってくれる量子ビーム解析を専門とする研究者を探し始め、紆余曲折の末に、京大複合原子力科学研究所（当時は原子炉実験所）の研究者と出会うことができた。共同研究を受け入れて下さったS先生は理学部物理学科の出身で中性子小角散乱を専門とするサイエンティストであり、バイオサイエンスを専門とする筆者とは知識や研究手法だけでなく数値や試料に対する感覚が非常に異なっていた。筆者にはそれが新鮮で勉強になったが、S先生には忍耐とご苦労をお掛けしたと思う。互いの知識や技術を補完し合う良い関係を築きながら研究を進めていただき、グリアジンの凝集体構造がナノスケールの会合体を基本とする階層構造であることを食品蛋白質として初めて明らかにすることができた。

共同研究を進める中でわかった「専門とする科学分野が異なれば、研究に関する価値観や人間関係の文化も異なる」ことも非常に興味深く面白かった。小麦蛋白質に限らず、ほとんどの食品蛋白質は加工調理の際に天然構造が崩れて不溶性凝集体となり、生体内では遭遇し得ない他の成分との相互作用のもとで食品加工特性を示す。このように非常に複雑かつ解析が難しい加工した食品蛋白質の研究には、異なる科学的思考と実験手法をもつ異分野の研究者との積極的な対話や共同研究が必須であると痛感している。幸い退職後も研究を継続する機会を頂いた。今後も可能な限り、食品科学と異分野との横断的な研究を進めていきたいと考えている。

（うらで れいこ，平成30年退職，元農学研究科教授，専門は食品科学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

科学の進歩を先導する技術革新

山本 拓也



“Progress in science depends on new techniques, new discoveries and new ideas, probably in that order, - Sydney Brenner”

20年程前、当時設置されたばかりの京都大学大学院生命科学研究所の大学院講義で、分子生物学の礎を築きノーベル生理学・医学賞を受賞したシドニー・ブレナー博士の上記至言を教わりました。「新しい技術が科学の進歩を先導する」ということを端的に言い表した文章ですが、私自身、その後20年間の研究活動でこのことを何度も実感することになりました。

私は大学院生のときから、細胞が状態を変化させる仕組みの解明に興味を持ち、研究を行っています。細胞の性質や機能といった細胞特性を規定するために重要な役割を果たすのがタンパク質です。タンパク質は細胞がもつDNA配列に含まれる情報をもとに合成されます。DNA配列が生命の設計図であるといわれる所以です。より正確には、DNA配列から写し取られたmRNAという物質から直接タンパク質が合成されます。細胞は、周囲の状況に応じて性質や機能等を切り換えますが、設計図(DNA配列)は基本的には変化しません。設計図(DNA配列)の使われ方が変化するのは、故に、細胞の状態が変化するときの仕組みを理解するには、設計図の使われ方の変化(mRNAの量の変化)を測定する必要があります。ただし、タンパク質を生み出すmRNAは細胞内に数万種類もあり、一筋縄ではいきません。

実際、大学院修士課程で行った研究では数百種類のmRNAしか調べることができず、違いが判明したmRNAも数十種類でした。ところが、博士課程進学後在籍した研究室に、マイクロアレイという当時最先端のシステムが導入されました。このシステムを利用した解析では、知られているほぼすべての数万種類にものぼるmRNAの量を一度に測定できるため、網羅的解析と呼ばれています。網羅的解析を実施した結果、修士課程2年間かけて得た何百倍ものデータを1週間程度で取得可能でした。このときの体験は忘れられません。

さらに数年後、次世代シーケンサー(Next Generation Sequencers, NGS)と呼ばれるシステムが登場し、生命科学研究を一変させました。NGSを用いると、mRNAの量だけでなく、その配列情報も正確に決定することができます。例えば、ヒトの細胞に存在するDNA配列も現在では1台のNGSを用いて数日間で決定できるようになりました。1990年に開始されたヒトゲノム計画(ヒト1人のゲノム配列を決定する国際共同プロジェクト)に10年以上の歳月が費やされたことを考えると、技術革新がもたらす科学の進歩の大きさは計り知れません。

iPS細胞研究所に異動後は、これらの機器を利用し、人工的に細胞の状態を変化させる仕組み、すなわちiPS細胞誘導過程における分子メカニズムの解明、に関する研究に従事しています。NGSで取得できる膨大なデータは、生命現象に関する情報の宝庫です。情報解析技術を駆使し、それらデータを有効に利用すれば、生命の本質的な真理へ迫れるのではないかと期待しています。

(やまもと たくや, iPS細胞研究所/ヒト生物学高等研究拠点准教授, 専門は分子生物学)

[目次に戻る ↗](#)

話題

広報倫理講習会を開催

12月11日(水)、附属図書館ライブラリーホールにおいて広報倫理講習会を開催しました。この講習会は、主に広報担当者を対象として、本学において定めている「広報にかかる基本方針」および「広報倫理ガイドライン」の内容を理解し、今後の活動に生かすことを目的として2年に1度、開催しています。

今回は小森悠吾 弁護士(弁護士法人大江橋法律事務所)を講師に迎え、「読み直そう、広報倫理ガイドライン～それ、大丈夫?」をテーマとして講義が行われました。

広報倫理ガイドラインの全7項において、広報倫理ガイドラインと法の解釈の違いを照らし合わせ、実際の実例紹介を交えて詳しく解説がありました。特に、正確性の保持、プライバシーの尊重、差別的表現の禁止については、近年の傾向や問題になりやすい事象を注意点も含め解説され、参加者は熱心に聞き入っていました。



講義の様子



小森弁護士による講義

(総務部(広報課))

[目次に戻る ↗](#)

令和元年度社寺見学会を実施

11月9日(土)、令和元年度京都大学社寺見学会『秋の古都奈良をたずねて』が行われ、59名が参加しました。円成寺、秋篠寺、名勝大乘院庭園(いずれも奈良市)を巡り、参加者はそれぞれの専門分野の講師の解説に熱心に聞き入っていました。

円成寺では国宝・重要文化財に指定された建築物や仏像を数多く拝観し、秋篠寺では芸芸



名勝大乘院庭園にて記念撮影

話題

天を代表とする仏像を見学，大乗院庭園では青空のもと庭園をゆったりと散策しました。

当日，解説いただいた講師は次のとおりです。

(歴史) 元木 泰雄 (人間・環境学研究科 教授)

(建築) 富島 義幸 (工学研究科 教授)

(造園) 柴田 昌三 (地球環境学 教授)

(美術) 根立 研介 (文学研究科 教授)

(総務部 (人事課))

[目次に戻る](#)

令和元年度総長杯ボウリング大会を開催

11月29日(金) 午後6時30分からROUND1 京都河原町店において，令和元年度総長杯ボウリング大会が開催され，44チームが参加しました。会場では投球ごとに大きな歓声が上がったりストライクも続出，大いに盛り上がった大会となりました。

大会結果は次のとおりです。

<団体>

優勝：医学部附属病院「BKBT」チーム (1,164ピン)

準優勝：医学部附属病院「おぺおぺな～すファイナル」チーム (1,156ピン)

<個人>

男性 優勝：柴原 康夫 (理学研究科) (357ピン)

女性 優勝：岡田 悦子 (企画・情報部) (338ピン)



優勝の医学部附属病院「BKBT」チーム



準優勝の医学部附属病院「おぺおぺな～すファイナル」チーム



個人優勝(男性の部)柴原さん(写真右から2人目)



個人優勝(女性の部)岡田さん(写真左端)

(総務部 (人事課))

[目次に戻る](#)

話題

宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは10月30日(水)に、宇治市東消防署の協力のもと宇治市で震度6弱の地震(南海トラフ地震)が発生したことを想定した、総合防災訓練を行いました。

京都大学危機管理計画(地震編)に対応する訓練に、地震時の安否確認・情報伝達の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションしたものです。

教職員で組織する自衛消防地区隊を中心に、その他の教職員、学生などキャンパス全体で総勢1,000名以上が参加し、初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、また避難状況の集計等、さまざまな場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践しました。また、本学で運用している安否確認システムを使用した情報収集の訓練も行いました。

避難訓練後は、宇治市東消防署の指導による消火器操作訓練も行い、参加者は熱心に説明を聞き、実際に消火器を手にとって体験しました。

最後に宇治地区世話部局長でもある橋本 学 防災研究所長の挨拶の後、宇治市東消防署から講評をいただき訓練は終了しました。



安否情報を集計する対策本部



消火器操作訓練



避難訓練の様子 1



避難訓練の様子 2

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで、リサイクルフェア・交流会を開催

宇治地区では11月5日(火)に、外国人研究者・留学生に対する支援および国際交流活動の一環として、リサイクルフェア・交流会を開催しました。本イベントは宇治地区関係者から遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供するもので、今年で14回目の開催と

話題

なりました。

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースには、関係者の協力により集まった約850点の物品が並べられ、研究者、留学生や、その家族など77名の来場者がありました。

毎年大人気のこの催しは、家具から電化製品、布団類、衣服や食器といった日常用品、子供用雑貨やおもちゃなどさまざまな物が出品され、単身者にも家族連れにも喜ばれており、隣の交流会会場では、参加者はお茶を片手に和やかな雰囲気の中、お互いの交流を深めました。

また、交流会コアタイムには、宇治地区研究所の所長等も参加し、橋本 学 防災研究所長による歓迎の挨拶の後、渡辺隆司 生存圏研究所長、山子 茂 化学研究所副所長、および森井 孝 エネルギー理工学研究所副所長からも挨拶がありました。

その後、グループ対抗の京都大学にちなんだクイズ大会が行われ、これに引き続き行われた電化製品等の抽選会で会場は大いに盛り上がりました。

宇治キャンパスでは、年間、外国人研究者約500名、外国人留学生約150名が研究のために来訪、滞在しており、今後もこういった生活支援・異文化交流事業を続けていく予定です。



リサイクルフェアの様子



交流会の様子



抽選会当選者を発表する橋本所長

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは11月15日(金)、宇治事業場衛生委員会主催ならびに宇治地区総合環境安全管理センター共催による宇治事業場「安全衛生講習会」を開催しました。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は、辻 佳子 東京大学環境安全研究センター長を講師に迎え、「教育・研究現場で生きる実効的な環境安全」をテーマに講演いただきました。

講演では、大学の責務と現状・課題について説明があり、環境安全教育について、東京大学の実例をもとに解説いただきました。

話題

講演に続き、辻センター長、中村正治 宇治地区総合環境安全管理センター長、榊原圭太 化学研究所助教、茅原栄一 同研究所助教、エネルギー理工学研究所博士課程の小西宏明さん、生存圏研究所修士課程の鹿島早帆さんが登壇し、「研究推進と安全管理のバランス」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

参加者は興味深い内容に熱心に聞き入り、講演後も質疑応答が続いて盛会のうちに終了しました。



【写真左】橋本 学 宇治事業場総括安全衛生管理者による挨拶
【写真右】講演を行う辻センター長



パネルディスカッションの様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、松浦邦男 名誉教授、吉田潤一 名誉教授、堂下修司 名誉教授、が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

松浦 邦男 名誉教授

松浦邦男先生は、9月18日逝去されました。享年92。

先生は、昭和27年京都大学工学部建築学科を卒業、同大学院へ進学し、昭和30年に京都大学工学部講師、昭和31年に同助教授に昇任されました。昭和37年に京都大学工学博士の学位を取得し、昭和40年に同教授に昇任されました。平成2年3月に停年退官され、本学より名誉教授の称号を受けられました。その後、平成2年から摂南大学教授、平成7年から平成11年は宝塚造形芸術大学教授を務められました。この間、日本建築学会理事、照明学会副会長、日本照明委員会副会長、国際照明委員会（CIE）の技術委員会委員長などを歴任されました。



先生は、京都大学建築学教室で前田敏男先生に師事し、建築環境工学の光環境（照明）の研究にご尽力されました。特に、室内各面での光束の反射を考慮した照明計算法として相互反射連立方程式を構築し、コンピュータがない時代にも関わらず実用的計算法を示されました。例えば、作業面切断公式は室内の作業面高さでの間接照度を簡易に計算する方法として今日でも有用です。

これらの研究と啓発活動に対して、昭和37年に「昼光照明における相互反射に関する研究」で日本建築学会賞、昭和55年に照明学会賞、昭和63年に「天空輝度分布の国際的標準化とCIE技術委員会TC-309の活動」に対して日本照明賞、平成5年に照明学会論文賞、平成7年にCIE AWARDS 1995、平成18年に「建築環境工学、特に光環境工学の研究・教育とその発展に対する貢献」に対して日本建築学会大賞を受賞されました。また、一連の教育研究活動、学界活動により、平成18年に瑞宝中綬章を受けられました。

（大学院工学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

訃報

吉田 潤一 名誉教授

吉田潤一先生は、9月14日逝去されました。享年66。

先生は、昭和50年京都大学工学部合成化学科を卒業、同大学院へ進学し、昭和54年に京都工芸繊維大学助手に採用されました。昭和60年に大阪市立大学助手、助教授を経て、平成6年に京都大学工学部教授に就任されました。その間、昭和56年9月に京都大学工学博士の学位を授与されました。平成30年3月に定年退職されるまでの永きにわたり、多くの優れた人材を育成され、本学より名誉教授の称号を受けられました。

先生は、有機電解合成の分野で「カチオンプール法」など新概念を提唱するとともに、フローマイクロリアクターを用いた化学合成に世界に先駆けて取り組み「フラッシュケミストリー」という新分野を開拓し、有機合成化学の新たな展開を先導してこられました。これらの成果は約300編の学術論文としてまとめられ、国内外で非常に高く評価されています。

また、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「反応集積化の合成化学革新的手法の開拓と有機物質創成への展開」を領域代表者として推進されるとともに、NEDOproject、京都大学マイクロ化学生産研究コンソーシアムなど数多くの大型プロジェクトも推進され、優れた研究成果をあげられました。これらの業績に対して、平成18年名古屋メダルセミナー・シルバーメダル、平成19年ドイツ・フンボルト賞、平成22年グリーン・サステイナブルケミストリー賞、平成25年日本化学会賞、平成26年米国電気化学会バイザール賞など数多くの賞を受けられ、平成27年紫綬褒章を受章されました。さらに、平成29年有機合成化学協会会長に就任、平成30年JST CREST「革新的反応」の研究総括、近畿化学協会フローマイクロ合成研究会代表幹事等の要職を歴任されました。

これら一連の教育研究活動、学界活動により、令和元年10月従四位に叙され、瑞宝中綬章を授与されました。



(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

堂下 修司 名誉教授

堂下修司先生は、令和元年11月20日に逝去されました。享年84。

先生は、昭和33年3月京都大学工学部電子工学科を卒業後、同大学大学院工学研究科修士課程電子工学専攻を経て、昭和38年3月に同博士課程電子工学専攻を単位修得退学されました。同年4月京都大学工学部助手に採用され、昭和40年4月同助教授に昇任、東京工業大学工学部助教授を経て、昭和48年7月京都大学工学部教授に就任し、新設間もない情報工学科情報処理講座を担任されました。この間、昭和41年9月に京都大学より工学博士の学位を授与されました。平成10年4月には新設された大学院情報学研究科教授に配置換となり、知能情報学専攻知能メディア講座を担任されました。平成11年3月に停年退官し、同年4月に京都大学名誉教授の称号を授与されました。京都大学大型計算機センターの創設にも尽力し、平成8年4月から退官まで同センター長を併任されました。また、昭和61年7月から平成2年3月まで文部省学術国際局科学官を併任されています。

先生は、永年にわたり情報学の分野における教育と研究活動に精力的にたずさわり、多くの有為な人材を育成するとともに、多くの先導的な研究業績を挙げられました。先生の主な研究内容は、1) 音声の分析及び自動認識、特に「音声タイプ」の開発、2) 形式的言語であるオートマトンの学習的構成などの人工知能の基礎、3) 音声処理・自然言語処理・知識処理を統合した音声対話システムの基盤、に大別されます。また、人工知能学会の設立・運営にかかわり、平成6年6月から2年間会長を務めています。

以上のとおり堂下先生は、音声メディア処理、人工知能等を含む知能情報処理分野のパイオニアとして、同学問分野の確立・進歩に大きく貢献され、これら一連の教育研究活動における功績により平成27年11月に瑞宝中綬章を受章されました。

(大学院情報学研究科)

[目次に戻る](#)

